

らに、ウェブトゥーンで描かれていたグンスとグンウォン兄弟の憎しみ会う対立関係の描写も変更や削除がおこなわれ、さらにセロイとイソ、グンスの三角関係の描写も弱まった。これによって、イソというキャラクターが男性同士の関係性に従属する「女性」でなくなった。とはいえ、グンスをめぐる変更によって、ドラマの物語におけるグンスの役割があいまいになったのは確かである。

戦うべき敵でありながらも兄弟のように情を交わす義兄弟の関係性が、物語の中で重要性を失い、むしろ男性同士の関係性は会長とセロイ、グンウォンとセロイという打ち倒すべき敵や憎むべき存在へ、つまり対立的関係へと一本化された。これはセロイの父とスア・セロイとの関係描写を強化することとも関連し、3-2でもふれた、「英雄譚」としての物語を強化するための選択であったと推測できる。

こうした男性同士の友愛関係の描写が弱まることで、ドラマは、より異性愛を強調する物語としての印象が強められたといえるだろう。

4. ドラマ化にあたって選ば取られた劇的エピソードと「普遍性」 とは

以上の分析結果から、翻案によって、女性の現実をふまえた女性像やロマンスの描きかた、およびテレビドラマの視聴形態を考慮し挿入される劇的エピソードや葛藤、キャラクターの普遍性への要求がどのように考慮され、表現されていたといえるだろうか。

まず、女性キャラクターの描き方とし

ては、全体的に社会・経済的能力と美しい外見を持つ存在に翻案され、野心をもって自らの選択を行う存在として、より強調して描かれたことが分かった。ドラマ版が、女性の現実を踏まえた問題提起を行うというよりは、女性の「理想像」を描き出そうと試みたといえるのかもしれない。

しかし同時に、「劇的エピソード」の必要性からか、ドラマでは主人公の成功が「運」と結び付けられドラマチックに展開するような物語が付け加えられた。また、父から受け継いだ能力の正統なる後継者として敵に打ち勝つ、といった「英雄譚」的な展開が強調された。セロイの成功への道のりが「聖戦」であるかのように位置付けられたために、ヒロインの一人であるスアが、その戦いにおいて獲得すべきもの、救い出すべき「姫」的存在になってしまった。

こうした翻案によって、ドラマは確かに、より「普遍的」な物語構造を強化し、広い視聴者に理解しやすいものとなったと思われる。が同時に、自律的な女性像、現在の女性の「理想像」を提示しつつも、異性愛中心のジェンダー構造から逃れきれない「獲得されるべき存在」としての女性キャラクターを描きだしてしまっただけといえるのではないだろうか。

次に、興味深いのはホモソーシャルな関係性を強調していたセロイとグンスの義兄弟的な結びつきの描写が削られたことである。これは第一に「英雄譚」としての物語を強調するための戦略であったと考えられる。だがこのことによって、もう一人のヒロインであるイソは、セロ